

クラシック作曲家が手がけた映画音楽

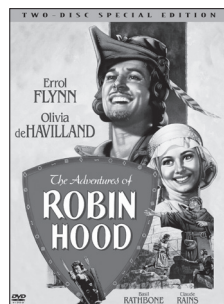
前島秀国

映画音楽は、作曲家が自発的に書く“芸術音楽”と異なり、映画会社やプロデューサー、あるいは映画監督から作曲依頼を受けて初めて生まれる“商業音楽”である。しかも、たった1本のギターのメロディでも、鼻歌でも、あるいは大編成の管弦楽曲でも、いったん映画の中で流れれば、それらはすべて“映画音楽”となる。そうした音楽は、時に映画の出来や興行収入を左右するほど大きな力を発揮するので、映画会社は古くから有能な作曲家を欲しがり、同時に映画音楽は多くの若手作曲家の重要な収入源となってきた。さらに映画に“箔”^{はく}を付けるため、すでに名声を得た作曲家に映画音楽が依頼されることも多い。ことクラシックに関して言えば、サン＝サーンスが無声映画『ギーズ公の暗殺』（1907）のために映画音楽を書いて以来、多くの有名作曲家が映画と深い関わりを持ち、20世紀の音楽史を彩ってきた。そして、作曲家たちが映画監督と緊密なコラボレーションを実現した時、名曲が誕生するケースが多いと言えるだろ

う。そうした成功例の中から、映画音楽を語る上で欠かせない重要な5人の作曲家に焦点を当てる。

歌のないオペラとして 作曲したコルンゴルト

1930年代前半までオペレッタの編曲・指揮活動で生計を立てていたエーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト（1897～1957）は、演出家マックス・ラインハルトのハリウッド監督デビュー作『真夏の夜の夢』（1936）のために、メンデルスゾーンの前奏曲を編曲した。この編曲が映画会社ワーナー・ブラザースに高く評価され、同社の歴史映画の音楽を次々に手がけていった。「映画音楽とは歌のないオペラである」「これまで書かれた最高の映画音楽はブッチャーニの〈トスカ〉だ」という彼の発言が端的に示しているように、コルンゴルトは映画音楽とオペラを同列に位置づけ、ワーグナー風のライトモチーフ技法を映画音楽に応用し、後期ロマン派ゆずりの壮麗なオー



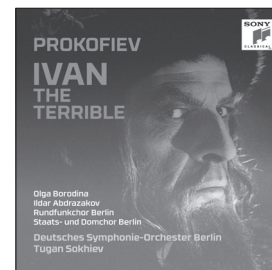
『ロビン・フッドの冒険 スペシャル・エディション』
DVD 2,980円＋税 ワーナー・ブラザース ホームエンターテイメント

ン・フッドの冒険』（1938）や『シー・ホーク』（1940）など、エロール・フリン主演の剣戟映画のために書かれた音楽である。また、コルンゴルトは映画音楽と演奏会用作品の作曲素材を相互に転用し、両者の垣根をなくした史上最初の作曲家となった。『ロビン・フッドの冒険』の音楽は、1919年作曲の交響的序曲〈スルスム・コルダ〉の素材を発展させたもの。逆に1945年作曲のヴァイオリン協奏曲（本年10月19日の読響《第563回定期》にて五嶋みどり独奏、カンブルラン指揮で演奏予定）には『風雲児アドヴァース』（1936）、『放浪の王子』（1937）、『砂漠の朝』（1937）、『革命児ファレス』（1939）の各テーマ曲が引用されている。

エイゼンシュテイン監督と プロコフィエフのコンビ作

1938年、アメリカ滞在中に『白雪姫』（1937）を見て感銘を受けたセルゲイ・

プロコフィエフ（1891～1953）はウォルト・ディズニーと面会を果たし、ハリウッドでいくつかの作曲依頼を受けたが、結局何も実現しないままソ連に帰国した。当時、セルゲイ・エイゼンシュテイン監督が歴史映画の撮影準備に取りかかっていたが、作曲を依頼していた作曲家がスケジュールの都合で降板したため、エイゼンシュテインはプロコフィエフに声をかけた。その結果生まれたのが、カンタータとしても有名な『アレクサンドル・ネフスキー』（1938）である。プロコフィエフ同様『白雪姫』を高く評価していたエイゼンシュテインは、ディズニーのような映像と音楽の完璧な一致をプロコフィエフに要求した。有名な“氷上の戦い”の場面では、騎馬軍団の攻撃や兵士たちの溺死など、さまざまなアクションが音楽とシンクロしているのを見ることができる。コンビ第2作となった『イワン雷帝』2部作（1944、1958）では、プロコフィエフが予め作曲した音楽を撮影現場で流すミュージカル映画的な手法が全面的に用いられた。第2部後半の“親衛隊員の宴”^{うたげ}の場面では、



『イワン雷帝』CD ©トウガン・ソビエフ「プロコフィエフ：オラトリオ『イワン雷帝』」SICC30189 ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル

久石譲の原点は ミニマル作曲家

バラライカやバヤンなどロシアゆかりの民俗楽器が主人公の旅情を表



読響が演奏した『風立ちぬ』

現し、読響が演奏するジンタの響きが昭和のロマンを強く感じさせた久石譲の『風立ちぬ』(2013)。久石は、宮崎駿監督の『風の谷のナウシカ』(1984)を手がけるまでは、ミニマル・ミュージックの現代音楽作曲家として活動していた。しかし、ここ数年は自らの原点を再確認するように〈Shaking Anxiety and Dreamy Globe〉や〈Single Track Music 1〉のようなミニマル作品を精力的に発表している。日本に1台しか存在しない6弦エレクトリック・ヴァイオリンを独奏楽器に用いた〈室内交響曲〉や、読響ソロ・コントラバス奏者の石川滋の高度な演奏技術を前提に作曲したコントラバス協奏曲では、ミニマルにとらわれない新たな作曲技法にも挑んでおり、今後の展開が大いに注目される。

(まえじま ひでくに／
サウンド&ヴィジュアル・ライター)

『オーケストラ・リハーサル』(1978)に到るフェデリコ・フェリーニ監督とのコンビ作である。ドヴォルザーク〈弦楽セレナーデ〉のラルゲット楽章の主題をトランペット用にアレンジして絶大な効果を上げた『道』(1954)、サーカス・ジンタの行進曲で「人生は祭だ!」というメッセージを伝えた『8 1/2』(1963)など、フェリーニ監督の幼児体験や猥雑な世界観を音楽で伝えながら、人間の喜怒哀楽を余すところなく表現してみせたロータは、まさに映画音楽の教科書と呼ぶべき存在だ。フェリーニ作品以外では、ルキーノ・ヴィスコンティ監督と組んだ『若者のすべて』(1960)や『山猫』(1963)、それにフランシス・F・コッポラ監督の『ゴッドファーザー』(1972)と米アカデミー作曲賞受賞『ゴッドファーザーPartII』(1974)が重要。これら4本の作品では、シチリア風のワルツ、もしくは8分の6拍子のシチリアーナ舞曲が“家族”や“世代交代”を象徴する重要な役割を果たしている。



『山猫』は今年より劇場で再上映される ©「ヴィスコンティと美しき男たち〜アラン・ドロンとヘルムート・バーガー〜」『山猫』4K修復版、5月14日(土)よりYEBISU GARDEN CINEMA他全国順次ロードショー

スタコフヴィチの晩年様式が音楽に色濃くにじみ出ている点でも非常に興味深い。『ハムレット』では、メインテーマに登場する鞭打ち音のモチーフが観客に“死”を強く意識させるが、この鞭打ち音のモチーフは5年後に作曲される交響曲第14番の中に形を変えて再登場する。一方、嵐の中をさまようリア王の狂気をオーケストラの凄絶な不協和音で表現した『リア王』では、クラリネット独奏のテーマが劇中に登場する道化を表現している。悲哀と寂寥感を漂わせながら、なおも戯けてみせようと試みるクラリネットの悲喜劇的な音楽は、ショスタコフヴィチ自身の音楽的自画像と言っても過言ではない。

フェリーニ監督と ニーノ・ロータ

ミラノ大学を卒業後、バリー音楽院で音楽教師の職についたニーノ・ロータ(1911~79)は1942年から本格的に映画音楽を手がけ始めた。映画音楽作曲家としての彼の名声を高めたのは、『白い酋長』(1952)から



ニーノ・ロータ ©de Antonis

ムソルグスキーの〈ボリス・ゴドゥノフ〉風の男声合唱がイワン雷帝の専制政治の恐怖を重々しく表現する。これを見て、あからさまに自分が批判されていると感じたスターリンは第2部の上映を禁止し、撮影半ばだった第3部のフィルムを焼却処分させた。1953年のプロコフィエフとスターリンの死から5年が経過するまで、ソ連当局は第2部の存在を隠し続け、『イワン雷帝』の楽譜出版を許可しなかった。

コージンツェフ監督と ショスタコフヴィチ

サンクトペテルブルク音楽院在学中、無声映画のピアノ伴奏のアルバイトをしていたドミトリー・ショスタコフヴィチ(1906~75)は、生涯に30本以上もの映画音楽を手がけた。とりわけ重要なのは、シェイクスピア研究家としても知られるグリゴリー・コージンツェフ監督とのコラボレーションだ。無声映画『新バビロン』(1929)とソ連初のトーキー映画『女ひとり』(1931)に始まる計10本のコンビ作は、エイゼンシュテインとプロコフィエフの共同作業に優るとも劣らない、ロシア映画音楽の金字塔と言えるだろう。その中で、コージンツェフがライフワークとして完成させた『ハムレット』(1964)と『リア王』(1971)は、ショ

亀山郁夫 — ①

Ikuro Kameyama

青春の息吹、人生の黄昏^{たそがれ}

プロコフィエフ：交響曲 第7番〈青春〉



私はクラシック音楽を、ある特定の時代における生きた人間ドラマと捉えています。作曲家や作品を取り巻いていた状況を想像しながら聴くことで、音楽から受ける感動はさらに高まると思うのです。

セルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）の音楽は、そのシニカルな創作態度にもかかわらず陶酔的な幸福感、ユーフォリックな調べに満ちています。ロシア革命後の亡命を経て1930年代にソヴィエトに帰国してからは、厳しい制約の下で新たな古典様式に転じ、明快で親しみやすい音楽を多く生み出しました。

中でも最晩年の1952年に書かれた交響曲第7番〈青春〉は、いろいろな意味で心を打たれます。この曲には希望に満ちた青春を謳歌する純粋無垢な心情と、幸福の絶頂の後に訪れるであろう世界の落日への予感が、同時に存在しているように感じられる。病に侵

され、死を予感した作曲家の「遺言」として聴けば、その思いはさらに胸に迫ってきます。

忘れられないのは、プロコフィエフ没後50年の2003年、NHK-FMの特集番組に出演し、スタジオでワレリー・ゲルギエフ指揮のロッテルダム・フィルによる〈青春〉交響曲の生放送を聴いたことです。第1楽章のあの印象的な出だし、素朴で明るいかどちよと物悲しいメロディーが流れてくると、オレンジ色の大きな夕陽が少しずつ地平線の彼方に沈んでいく光景が目の前に浮かびました。美しい青春と黄昏が混然一体となった、何とも言えない雰囲気に圧倒されました。

プロコフィエフは20世紀初め、モダニストの作曲家として頭角を現し、前衛的な作品を次々に発表しました。私は〈スキタイ組曲〉（1915）を聴くたびに、ロシアの伝統に根ざした歌心が野心的な作風によって見事に表現され

ていることに驚かされます。

ところが14年間におよぶ欧米での亡命生活を経て帰国すると、ロシアでは共産党の支配下でスターリンの独裁体制ができあがっていた。万人にわかりやすい社会主義リアリズムに基づく創作を強制される中、プロコフィエフはかつての前衛的な響きを叙情的なメロディーに置き換えることで政治的な問題をクリアしたのです。

カンタータ〈アレクサンドル・ネフスキー〉（1939）も大好きな曲です。この曲のクライマックスである“氷上の戦い”は音楽による一大スペクタクルですが、軽快でポリフォニックな音の遊びに満ちていて、シリアスな雰囲気はまるでない。そして“アレクサンドル・ネフスキーの歌”は、ロシアの大地のうねるような起伏をそのまま音楽にしたように高揚し、まれに見るユーフォリックな響きを聴かせます。

プロコフィエフは自らの才能と作曲テクニックに非常に大きなプライドを持っていたので、粛清の嵐が吹き荒れる時代でも音楽家として超然とした態度を保てたのでしょう。その代わり、政治的には日和見主義でどんな要求にも迎合する。〈十月革命20周年記念のためのカンタータ〉（1937）はその典型です。ある意味ニヒリストであり、どんな状況下でも自分のために音楽の喜びを紡ぐことができたのです。



モスクワ近郊の別荘でくつろぐプロコフィエフ（1950年）

1930～40年代にソヴィエト・ロシアが経験した戦争と大粛清の恐怖を、プロコフィエフは持ち前の楽家気質で乗り越えました。それは当時の時代状況を知れば知るほど、かけがえのない貴重な精神だったと思えます。そして最後の交響曲で青春の息吹を天衣無縫に描き、聴き手を陶酔的な心地よさに導き、人生の黄昏への思いを込めたのです。このシンプルで飾り気のない音楽を聴くことは、私にとって快感であり喜びです。（聞き手・事務局）

profile かめやま・いくお

1949年栃木県生まれ。名古屋外国語大学長。音楽、美術を含むロシア文化・文学研究の第一人者。翻訳したドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』はベストセラーに。2013年『謎解き「悪霊」』で読売文学賞受賞。著書・訳書多数。

◎首席ティンパニ奏者

武藤厚志

Atsushi Muto

ドーンと一打入魂！
曲の雰囲気、がらりと変えます

「武藤さんは、札幌交響楽団の首席奏者を経て昨年12月に読売日本交響楽団に入団したニューフェイスです」

素晴らしい先輩方の後任となるだけに入団が決まるまで緊張しましたし、テスト期間も含めて激動の1年でした。他のオーケストラと比べると、プログラムに大編成の曲、現代曲が多いし、音を出すタイミングや音程感にもわずかながら違いがある。自分の演奏感覚も微妙に修整しないといけません。ベートーヴェンやブラームスなど何度も演奏した曲でも、毎回気持ちを入れ替えて一から勉強しています。結構新たな発見をするんですよ。

「目立つ楽器だけに、他の楽器とのアンサンブルには気を使うのでは？」

たとえばティンパニの場所から管楽器は近いですが、弦楽器は遠い。弦との絡みが多い曲だとタイミングを合わせるのが難しい。また、ティンパニの表面は子牛の皮ですから、ホールの空調や照明によって音程が左右される。

休みの間に半音ぐらい変わっていることだってあるので、演奏の合間に微調整は欠かせません。

バチはごく軽く握らねばいい音は出ません。気合を入れて叩くとその反動も大きいので、バチが飛んでいかないよう気をつけねばなりません(笑)。

「武藤さんは東京出身。日大豊山高校を経て東京音楽大学へ。なぜティンパニを選んだのでしょうか」

音楽を始めるきっかけは中学のブラスパンド部です。太太鼓、小太鼓、鍵盤、ドラムセット、ティンパニ、シンバルと何でもやりました。高校2年生の頃、レコードでベートーヴェンの交響曲第5番〈運命〉を全曲聴いて大きな衝撃を受けたことがありました。3楽章から4楽章にかけてティンパニが凄くカッコいい。それからですね、クラシック音楽が好きになったのは。吹奏楽と違ってオーケストラ曲にはティンパニがたくさん登場するから、必然的にティンパニにハマっていきました。最初に師事したのは久保昌一先生(現N響首席奏者)で、ティンパニの基礎をしっかりと教えていただきました。打楽器科で小太鼓やマリンバではなくティンパニで受験できるのは当時東京芸大と東京音大しかありませんで



した。大学はあまり選べなかったのです。

「エキストラ(賛助出演)として初めて経験したプロのオーケストラは読響だったそうですね」

プロのオーケストラは、初めて来る若手のエキストラにティンパニを任せることはめったにありません。将来ティンパニ奏者を夢んでいた僕は、大学の地下練習室にこもって夜中まで練習ばかりしていたので、エキストラのお話が来ないのは当然でしたが、焦らないでしっかりやろうと考えていました。ちょうど大学卒業の頃です、読響からエキストラに誘われたのは。当

時、読響のティンパニ首席奏者は東京音大准教授でもあった菅原淳先生。ブリテンの〈シンフォニア・ダ・レクイエム〉、エルガーの交響曲第1番で小太鼓やタンブリンなどを担当しました。その仕事があったから、僕は大学の卒業式には出席しなかったんですよ。《オーケストラの花形とも言えるティンパニの魅力は》

ドーンと一打入魂(笑)。一打で曲の雰囲気をがらりと変えてしまうところです。ティンパニストが最も重要視しているのは、ベートーヴェンの九つの交響曲。とくに〈第

九〉のティンパニの使い方は素晴らしい、当時としては画期的でした。ブラームスの交響曲第1番の出だしなんか最高ですね。チャイコフスキーの交響曲第6番〈悲愴〉は大好きです。地味だけど楽しいのはシベリウス。R. シュトラウスの交響詩〈ツァラトゥストラはかく語りき〉の冒頭もティンパニスト冥利に尽きます。一方、コントラバスやチューバなどとともにオーケストラ全体を支える音を担うのも、ティンパニの魅力の一つです。読響で今後多くの曲を演奏しますが、一人でも多くのお客様に感動していただけるよう頑張ります。

多才な活動で注目を浴びる鈴木優人、待望の初登場！

6/7 (火) 19:30 第10回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《鈴木優人指揮の小編成オーケストラ》 武満徹：地平線のドーリア
C. P. E. バッハ：チェンバロ協奏曲 メンデルスゾーン：交響曲 第1番
指揮・チェンバロ：鈴木優人



鈴木優人

ウィーン響などで絶賛された名匠エルツの〈展覧会の絵〉

6/11 (土) 14:00 第89回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

6/12 (日) 15:00 第2回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

グリーンカ：歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲 ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番
ムソルグスキー（ラヴェル編）：組曲〈展覧会の絵〉
指揮：オラリー・エルツ ピアノ：アンナ・フェドロヴァ



オラリー・エルツ

カンブルランが振る二つの名曲〈皇帝〉&〈火の鳥〉

6/18 (土) 14:00 第188回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

6/19 (日) 14:00 第188回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ストラヴィンスキー：管弦楽のための4つの練習曲
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第5番〈皇帝〉、バレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉から
ストラヴィンスキー：バレエ組曲〈火の鳥〉(1919年版)
指揮：シルヴァン・カンブルラン ピアノ：ハヴィエル・ペリアネス



シルヴァン・カンブルラン

好評カンブルランのブルックナー、デュティユーではケラスが共演！

6/24 (金) 19:00 第559回 定期演奏会
サントリーホール

ベルリオーズ：序曲〈宗教裁判官〉 デュティユー：チェロ協奏曲
〈遙かなる遠い世界〉 ブルックナー：交響曲 第3番〈ワグナー〉
指揮：シルヴァン・カンブルラン チェロ：ジャン＝ギアン・ケラス



ジャン＝ギアン・ケラス

迫力のクライマックス！ 華麗なるマーラーの大管弦楽

6/29 (水) 19:00 第593回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

6/30 (木) 19:00 第14回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール (大阪)



小菅 優

リスト：ピアノ協奏曲 第2番 マーラー：交響曲 第5番
指揮：シルヴァン・カンブルラン ピアノ：小菅 優

6月 公演の聴きどころ

7日は、よみうり大手町ホールの501席という親密な空間で小編成のオーケストラや室内楽をお届けする《読響アンサンブル・シリーズ》の今シーズン初回。指揮とともにチェンバロ&オルガン奏者として国際的に活躍中の鈴木優人が初共演する。読響が世界初演した武満徹の傑作で幕を開け、古典派のC. P. E. バッハのチェンバロ協奏曲では弾き振りを披露。後半は若きメンデルスゾーンの作品を、情熱的に歌いあげる。開演前のプレトークもお楽しみに。

11、12日は、ウィーン放送響や北ドイツ放送響と共演するエストニアの実力派エルツが登場。切れ味鋭い解釈で、ムソルグスキー〈展覧会の絵〉などロシア音楽をダイナミックに表現する。協奏曲ではウクライナ生まれの新星ピアニスト、アンナ・フェドロヴァが、フィギュア・スケートの音楽で人気が高まるラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を華麗に響かせるだろう。

6月後半には、常任指揮者シルヴァン・カンブルランが登場。18、19日の《マチネーシリーズ》では、“色彩の魔術師”の異名の通り、ストラヴィンスキーのバレエ音楽〈火の鳥〉などで手腕を発揮する。ベートーヴェンのピアノ協奏曲〈皇帝〉では、スペインの若手技巧派ハヴィエル・ペリアネスが共演。バレンボイムの薫陶を受けた逸材で現地の評価も高く、カンブルランと熱のこもった掛けあいが楽しみだ。

24日は、フランスの著名な現代作曲家、アンリ・デュティユーの生誕100年を祝して、チェロ協奏曲〈遙かなる遠い世界〉を取り上げる。ソリストはフランス系屈指の名手、ジャン＝ギアン・ケラス。後半は、「新しいブルックナー像を提示した」と昨シーズンの交響曲第7番が絶賛されたカンブルランによるブルックナーの第3番を注目したい。今回はどんな発見や驚きをもたらすだろうか。

29日と30日は、小菅優が幻想味あふれるリストの難曲、ピアノ協奏曲第2番で共演し、著しい進境を示すだろう。また、死から生へという流れが印象的なマーラーの代表作、交響曲第5番にカンブルランが初挑戦。現代からの視座を加えてどんな世界を繰り広げるのか、興味がつきない。（文責：事務局）

読響チケットWEB

検索

ウィーン放送響率いる新鋭マイスターが振る〈悲劇的〉

7/14(木) 19:00 第560回 定期演奏会
サントリーホール

ハイドン：交響曲 第6番〈朝〉
マーラー：交響曲 第6番〈悲劇的〉
指揮：コルネリウス・マイスター



コルネリウス・
マイスター

欧州で活躍する二人の実力派が贈る《直球プログラム》

7/18(月祝) 14:00 第90回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

7/19(火) 19:00 第594回 名曲シリーズ
サントリーホール

ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲
ブラームス：交響曲 第2番
指揮：コルネリウス・マイスター
ヴァイオリン：バイバ・スクリデ



コルネリウス・
マイスター



バイバ・スクリデ

俊英リープライヒの〈運命〉× 期待の新星・牛田のショパン

7/23(土) 14:00 第189回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

7/24(日) 14:00 第189回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

メンデルスゾーン：序曲〈フィンガルの洞窟〉
ショパン：ピアノ協奏曲 第2番
ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉
指揮：アレクサンダー・リープライヒ
ピアノ：牛田智大



アレクサンダー・
リープライヒ



牛田智大

フランクフルト歌劇場音楽総監督のヴァイグレが読響初登場！

8/17(水) 19:00 第595回 名曲シリーズ
サントリーホール

メンデルスゾーン：序曲〈ルイ・ブラス〉
シューマン：交響曲 第4番
ドヴォルザーク：交響曲 第8番
指揮：セバスティアン・ヴァイグレ



セバスティアン・
ヴァイグレ

オペラを得意とする名匠が振る R. シュトラウス・プログラム

8/23(火) 19:00 第561回 定期演奏会
サントリーホール

R. シュトラウス：交響詩〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な
いたずら〉
R. シュトラウス：4つの最後の歌
R. シュトラウス：家庭交響曲
指揮：セバスティアン・ヴァイグレ
ソプラノ：エルザ・ファン・デン・ヘーヴァー



セバスティアン・
ヴァイグレ



エルザ・ファン・
デン・ヘーヴァー

ウィーン・フィル首席の D. オッテンザマーが妙技を披露

8/27(土) 14:00 第190回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

8/28(日) 14:00 第190回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ウェーバー：歌劇〈魔弾の射手〉序曲
モーツァルト：クラリネット協奏曲
ブラームス：交響曲 第1番
指揮：セバスティアン・ヴァイグレ
クラリネット：ダニエル・オッテンザマー



セバスティアン・
ヴァイグレ



ダニエル・
オッテンザマー

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休)
ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

第17回東京国際音楽コンクール入賞デビューコンサート

■ 5/19 (木) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール

指揮：コリーナ・ニーマイヤー

太田 弦

ディエゴ・マルティン・エチェバリア

プロコフィエフ／バレエ音楽〈ロミオとジュリエット〉より第2組曲

チャイコフスキー／幻想序曲〈ロミオとジュリエット〉

交響曲 第5番

[料金] S ¥2,500 A ¥2,000

[お問い合わせ] 東京オペラシティチケットセンター 03-5353-9999

日本テレビ「読響シンフォニックライブ」 公開収録

■ 7/5 (火) 19:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：本名徹次

ユーフォニアム：^{ほかぞの}外園祥一郎

語り：溝端淳平

マルセル・ケンツビッチ／ユーフォニアム協奏曲〈皇帝〉

チャイコフスキー／バレエ音楽〈白鳥の湖〉(抜粋／語り付き)

ラヴェル／ボレロ ^{ほか}

[お問い合わせ・詳細] 「読響シンフォニックライブ」ホームページ

<http://www.ntv.co.jp/yomikyo>

[応募締切] 5/25 (水) 当日消印有効

小林研一郎×宮田大×読売日本交響楽団

■ 7/9 (土) 15:00 かつしかシンフォニーヒルズ モーツァルトホール

指揮：小林研一郎

チェロ：宮田 大

ドヴォルザーク／チェロ協奏曲

ブラームス／交響曲 第2番

[料金] SS ¥5,800 S ¥5,000 A ¥3,500 バルコニー ¥2,500

[お問い合わせ] かつしかシンフォニーヒルズ 03-5670-2233